史跡 平出遺跡

遺構確認調査報告書

—昭和 55 年度—

昭和 56 年 2 月

塩尻市教育委員会

史跡 平出遺跡

遺構確認調査報告書

—昭和 55 年度—

昭和 56 年 2 月

塩尻市教育委員会

序

平出遺跡は昭和22年から27年にかけて大規模な発掘調査が行われ，縄文時代から平安時代にかけての幾多の貴重な資料が発見され，昭和27年３月には国の史跡に指定されました。

しかし，史跡指定より既に30年近い年月が経過し，この指定地が市街地に隣接しているため宅地化の傾向が見え始めてまいりました。このため塩尻市教育委員会では昭和50年から51年度にかけて文化庁ならびに県教育委員会の指導のもとに平出遺跡保存管理計画が策定されました。この計画書の将来計画の中に「遺跡内未調査地区の遺構確認調査の実施」が掲げられています。塩尻市教育委員会では，この保存管理計画書に基づき，国・県の補助事業として昭和54年度から昭和56年度までの３年計画で遺構確認調査を実施することとなり，昭和54年度には指定地内東部地域の調査を行いました。本年度はその２年目にあたり，史跡指定地北端地域の調査を計画，実施しました。

調査にあたっては，原嘉藤先生を団長に，調査員には中信考古学会の先生方に，また調査補助員には信州大学考古学研究会を中心とする大学生にお願いし，初冬の寒さの中で献身的な御尽力を賜わりました。また，今回の確認調査が無事終了できましたことは，地主の川上武雄，川上譲，中野元弘各氏をはじめ，平出区長平林一夫，区長代理二村徳久，農業委員平林金男各氏等地元の方々の深い御理解と御援助によるものであります。ここに衷心より敬意と感謝をささげる次第であります。

昭和56年２月

塩尻市教育委員会

教育長　小　口　利兵衛

例　言

1．本書は塩尻市教育委員会が長野県塩尻市大字宗賀所在の史跡平出遺跡の遺構確認調査を昭和56年度国県の補助事業として実施した報告書である。

2．調査は平出遺跡調査団（団長・原嘉藤）に委託し，現場での調査は昭和55年11月７日から11月17日まで行った。

3．遺物および記録類の整理作業から報告書作成までは平出遺跡考古博物館において，11月18日から昭和56年２月まで行った。

4．本書は原団長を中心に，各調査員・調査補助員の共同討議の上で執筆された。

5．調査に当り，土地の所有者ならびに平出区関係者各位には多大の御配慮をいただいたことを銘記しお礼としたい。平林一夫，二村徳久，平林金男，川上武雄，川上譲，中野元弘（敬称略）

6．遺物整理から報告書作成にいたる過程で次の方々の参加協力を得た。
直井雅尚，鳥羽嘉彦，大竹庄司，石渡俊一，小嶋秀典，宮城孝之，篠宮正。

7．出土品・諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目　次

序　文

第Ⅰ章　調査経過

第１節　調査にいたるまでの経過……1

第２節　発掘調査の方法……2

第３節　調査日誌……2

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の立地および自然環境……6

第２節　確認調査の要約……12

第３節　遺跡の層序……14

第Ⅲ章　遺構・遺物……14

第１節　溝状遺構……15

第２節　遺構外出土遺物……22

第Ⅳ章　遺跡の北限……25

第Ⅴ章　結　語……27

挿図目次

第１図　史跡指定地全体図……3
第２図　発掘区全体図……4
第３図　平出遺跡位置図……6
第４図　遺跡付近の地形断面図……7
第５図　段丘面区分図……8
第６図　発掘地点と平出の泉を結ぶ地質断面図……9
第７図　昭和電工塩尻工場内深井戸柱状図……10
第８図　溝状遺構……16
第９図　溝状遺構遺物出土状態……17
第10図　溝状遺構出土土器……18
第11図　溝状遺構出土遺物……20
第12図　遺構外出土土器……23
第13図　遺構外出土石器……24

表 目 次

第１表　段丘面群の分類……8
第２表　地区別遺物出土表……12

図版目次

第１．　調査地域全景
第２．　調査地域全景
第３．　溝状遺構全景
第４．　溝状遺構全景
第５．　溝状遺構全景・土層堆積状態
第６．　遺物出土状態

第Ⅰ章　調査経過

第１節　調査にいたるまでの経過

平出遺跡が昭和20年代の大規模な発掘調査により縄文時代および古墳～平安時代にかけての重要な遺跡であることが判明し，この結果をうけて国の史跡に指定されたのは昭和27年のことであった。(第１図)。以来，既に30年近くの日時が経過し，史跡指定地周辺にも様々な変化が生じ，特に市街地に隣接していることもあり宅地化の傾向が顕著に見え始めてきた。このため昭和50年・51年度の両年にわたり塩尻市教育委員会では文化庁ならびに県教育委員会の指導のもとに平出遺跡の保存管理計画書を策定した。この計画書の将来計画の中に「この遺跡の中心および性格等は過去の数％の発掘調査のみでは正確な判定はできない。またこの遺跡が南方（現在の平出部落方向）へのびていることは前述のとおりであり，東限と西限も未確認のままである。従って，近い将来において，これら未確認な諸点を見極めるためにも，未調査地区の年次計画的な遺構調査が必要である」と遺跡内未調査地区の遺構確認調査の必要性が述べられている。

そこで塩尻市教育委員会では昭和54年度から３年計画で，遺跡の範囲が不明確な史跡指定地の東・北・西側地区の遺構確認調査を計画した。この計画に基づいて昭和54年度は遺跡の東限を窮めることを目的に，指定地東部地区の調査を実施し，おおよその東限を知ることができた(注１)。２年次の本年度は北限を知るために指定地北側地区の調査を行なった。

昭和55年10月８日，平出公民館において，本年度調査予定地区の地主川上武雄，川上譲，中野元弘の３氏および平出区長平林一夫，区長代理二村徳久各氏と市教育委員会関係者が調査に関する話し合いを行う。

11月６日，現地に調査区の設定を行い，翌11月７日より発掘調査を開始した。

調査に当たっては，調査団長を原嘉藤先生にお願いし，調査員には中信考古学会の諸先生方に，また調査補助員には信州大学考古学研究会を中心とする大学生にお願いした。諸先生方・学生には本務多忙のところ御指導をいただき，厚く御礼申し上げたい。

調査団の構成は次のとおりである。

調査団長　原嘉藤

調査員　大久保知己，倉科明正，神沢昌二郎，熊谷康治，中島豊晴，三村肇，山本紀之

調査補助員　上野山恭和，大竹庄司，石渡俊一，奥山元彦，小島秀典，込山秀一，小林政子，酒井雅敏，作田恵理子，佐藤保久，篠宮正，鳥羽嘉彦，林芳郎，平尾佳代，白崎卓，深井幸人，直井雅尚，宮城孝之，竹内稔，永井ちひろ，船阪さとみ，原山幸三，宮坂靖子，山口秀和

調査参加者　小池国蔵，林正千代，大野田力雄，川上菊子，川上美代治，松井光子，武居豊子，竹内正直，奈良井稔夫，甕慎治，塩原博之，田村秀則，長瀬真，丸山広，竹原学，中山玲子，百瀬敦子，荻原辰英，柳沢充人，中村修，高橋康枝，田中希代子，井口秀子，腰原英子，加納宜子，島田哲男，川上武雄，中野元広，小柳みぎわ

（注１）　昭和54年度の東限の調査に関しては「史跡平出遺構確認調査報告書――昭和54年度――」を参照していただきたい。　（事務局）

第２節　発掘調査の方法

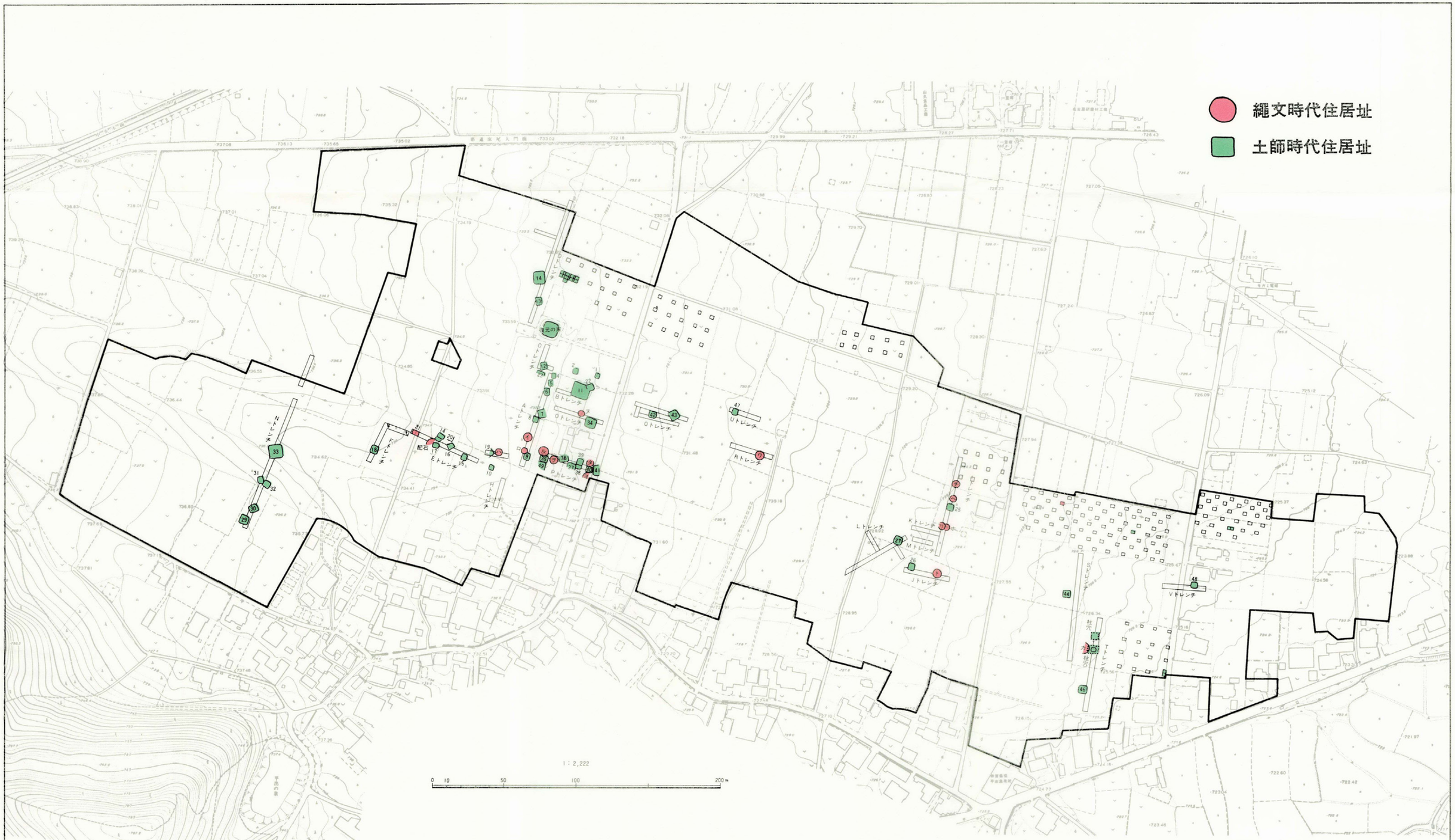
前節で述べたように，今年度の発掘調査の目的は平出遺跡の北限を知るためのものであったため，調査地域は昭和26年の第３次調査時のI.O.Uトレンチおよび復原家屋（第３号住居址）の北側の地域で，果樹園地帯以外の畑地で，調査可能の地区を実施した（第２図）。

発掘調査実施にあたっては，調査可能の畑地部分5750m²を対象とし，そのうち561m²を調査した。グリッド設定には３ｍ×３ｍを単位とし，南北方向にＡ～Ｈ，東西方向に１～11区の計52グリッドを設定した。これらのグリッドの調査の経過中，遺構の検出があった場合，その遺構の性格を知り得る範囲までの拡張は行うが，性格がある程度把握できた段階でそれ以上の拡張は行わず，調査を打ち切ることにした。それ故，遺構の全掘はしなかった。

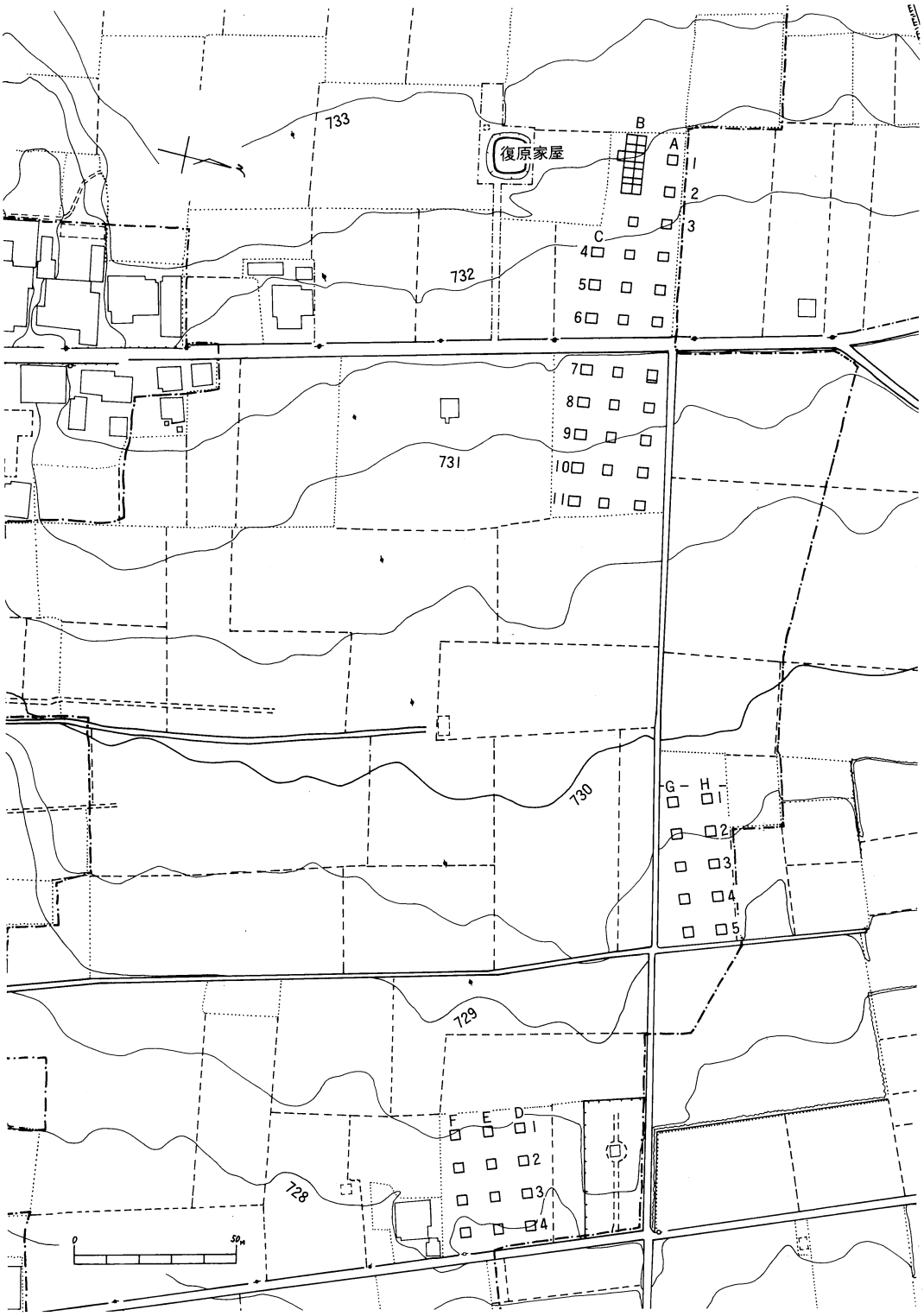
第３節　調査日誌

11月６日㈭晴，午前中，中野元弘氏の畑地にＡ～Ｃ１～６のグリッド設定を行う。午後，発掘器材の運搬および畑に残されていたマルチの除去を行う。

11月７日㈮晴，午前９時，原団長以下全員調査現場に集合する。原団長より調査に至るまでの経過，調査の目的を含めた挨拶があり，つづいて事務局小林より発掘に際しての注意事項・説明があり，その後直ちに発掘調査に入る。Ａ～Ｂ１～６，Ｃ４～６の各グリッ



第１図　史跡指定地全体図



第2図　発掘区全体図（1：2,000）

ドの掘り下げを行う。各グリッドとも遺物の出土は少く，Ｂ１を除いて遺構は何ら検出されなかった。Ｂ１には幅1.5ｍほどの落ち込みが確認された。

11月８日(土)曇，昨日に引き続いてＡ～Ｃの各グリッドの掘り下げを行い，掘り下げをほぼ完了する。一部セクション図の作製を始める。Ｂ１からは落ち込みの部分から土師器，須恵器片が出土している。

11月９日(日)晴，日曜日のため多くの参加者があり，作業はおおいに進んだ。Ａ～Ｃ1～6の各グリッドはＢ１を除いて調査が完了した。午後，道路東側のＡ～Ｃ７～11グリッドの掘り下げを開始する。Ａ～Ｃ１～６より更に遺物は少いようである。

11月10日(月)晴，Ａ～Ｃ７～11の掘り下げを続行する一方，Ｂ１検出の遺構の性格を知るべく東西に拡張区を設け，掘り下げを行う。溝状部分に遺物の出土も集中するようである。

11月11日(火)晴，Ａ～Ｃ７～11は掘り下げが完了したためセクション図の作製に入る。Ａ～Ｃ７～11では結局遺構は何も確認されなかった。また遺物の出土も極めて僅少であった。Ｂ１の溝状遺構は溝が弧を描いて発見され，円形になるものと推定された。

11月12日(水)晴，Ｂ１の溝上遺構の追求を行う一方，既に発掘が完了しているＡ～Ｃ１～６の埋めもどしを行う。また東方200ｍの地点にＤ～Ｆ１～４のグリッドを設定する。なお信大考古研による平出ニュースNo.１の発刊があり，また中原市教育委員長，小口教育長，塩原社会教育課長の視察があった。

11月13日(金)雨後曇，夜半より雨が降り，朝方まで小雨が残ったが，調査を行う。雨のため少人数ではあったが，Ｂ１を中心とする溝状遺構のセクション図を作製し，セクションベルトを除去し，全体を露呈する。その結果直径13cmほどの円形を呈するものと考えられ，そのうちの約３分の１ほどを調査したことになった。

11月14日(金)晴，溝状遺構を精査し，平面図を作製する。一方，調査が終了したＡ～Ｃ７～11の埋めもどしを行う。

11月15日(土)晴，Ｄ～Ｆ１～４の掘り下げを行い，夕方までにほぼ掘り下げを終了する。遺物の量は各グリッドとも極めて少く，遺構も検出されなかった。

11月16日(日)晴後曇，Ｄ～Ｆグリッドのセクション図を作製し，図化が終了したグリッドから埋めもどしを行う。また西方70ｍの地区にＧ～Ｈ１～５グリッドを設定し，一部掘り下げを始める。

11月17日(火)曇，Ｇ～Ｈ各グリッドのセクション図を取り，終了次第埋めもどしを行う。またＢ１の溝状遺構部分の埋めもどしも行い，現場における調査は完了した。

11月18日～昭和56年２月，出土遺物，諸記録を整理し，報告書の準備を行う。

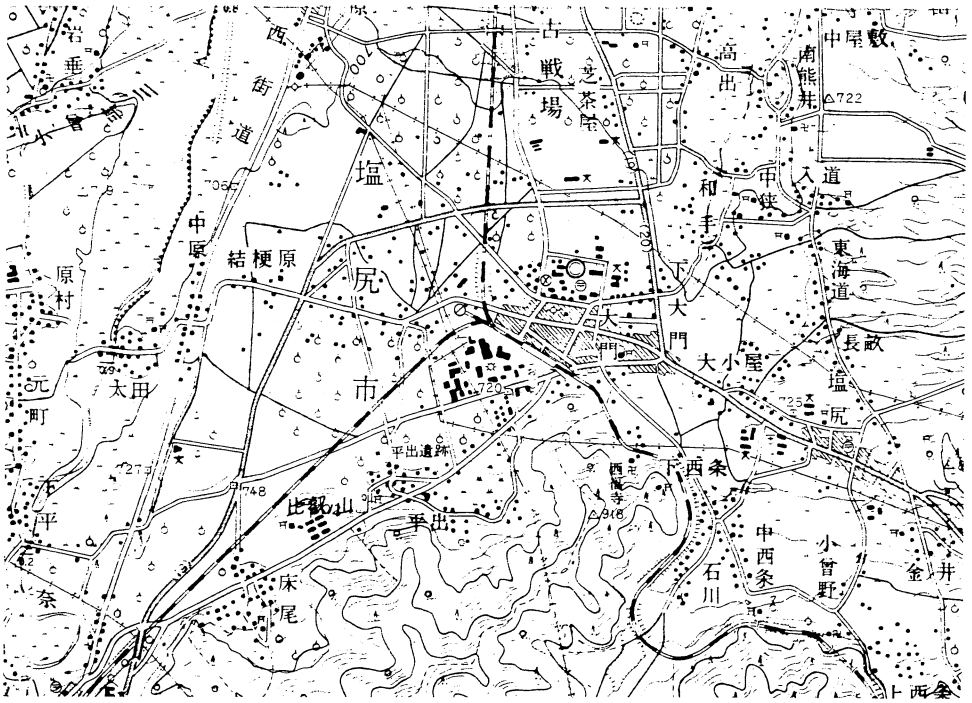
（小林　康男）

第Ⅱ章　遺跡の概要

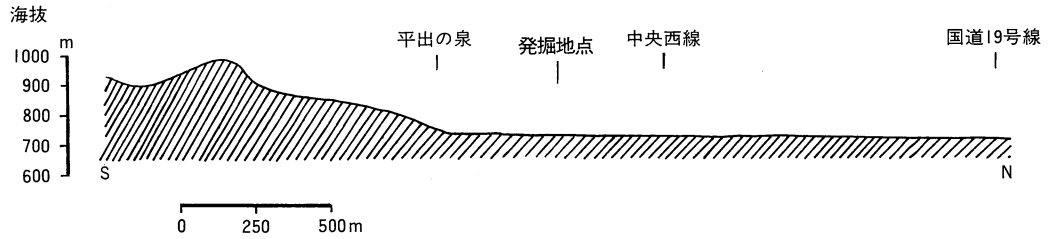
第１節　遺跡の立地および自然環境

１．位置と周辺の地形

平出遺跡は，松本平の南端，塩尻市西南部の平出地区に位置する。国鉄塩尻駅から中央西線に乗ると進行方向左手，昭和電工の建物が終わるあたりから視野が開け一面の畑地が展開するが，ここに平出遺跡は立地する。すぐ南側には，木曽山地の北縁部に位置する海抜1000ｍ前後の鈍頂地形をなす山々が迫っており，また南西方向にはこれらの一角から分岐する海抜810ｍの比叡ノ山の小丘が横たわっており，遺跡はちょうどこれらの懐に抱かれている形になる（第３・４図）。平出考古館は，この比叡ノ山が分岐する首部に設けられている。



第３図　平出遺跡位置図　　（１：50,000）



第4図　遺跡付近の地形断面図　　（N－S）

ここからは東に高ボッチ，鉢伏山などの筑摩山地の連なりが，そして西には穂高連峰の雪景を中心とする北アルプスの峻嶺を臨むことができる。眼前の広大な松本平と，それを取り囲むこれらの屏風絵の調和は，この地の象徴であり，それはおそらく古代人にも感慨無量の念を与えていたにちがいない。

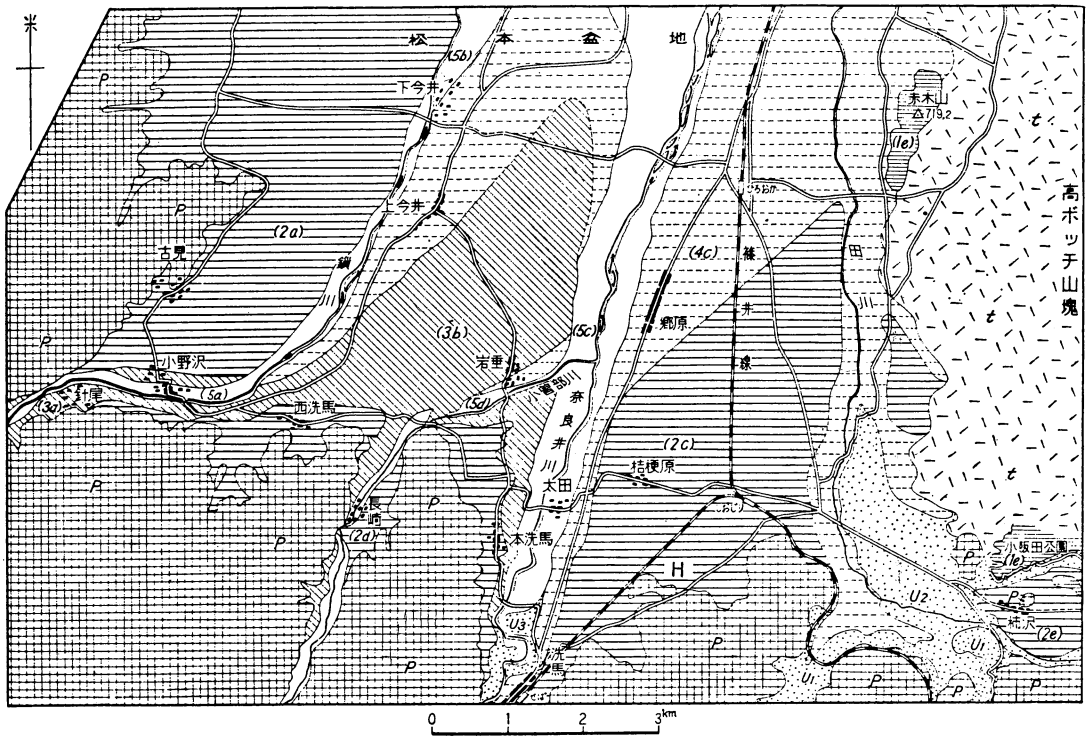
この付近は，桔梗ケ原高地と呼ばれ，洪積世の頃，木曽谷から松本平に流出する奈良井川によって形成された扇状地が，その後の地盤隆起によって高地化し，隆起扇状地となったものである。この桔梗ケ原面は，いわゆる〝高位段丘〟面で，波多面，鎖川西岸の古見台地，小曽部川沿いの長崎面などがこれに相当する。北東へ約１／40の緩やかな傾斜をもって低下しているために，奈良井川沿いでは，比高全30m，４段の明瞭な構造段丘が発達しているのに対し，塩尻の街の東方に平行して北流する田川沿いでは，比高はほとんど失くなっており，河岸段丘も明瞭でなない。（第５図，第１表）。

今回の発掘地点は，史跡指定地の中央よりやや西寄りの北縁部に位置し，わずか26m南側には復元家屋が設けられている地点である。海抜は732ｍで，後述する平出の泉からは，N30Eの方向にあたる。

２．地質概要（第６図）

桔梗ケ原面を構成する波多礫層は，御岳火山の噴出物である小坂田ローム降灰期の堆積物に相当し，従来，小林（1961）が小野沢礫層上部あるいは柿沢礫層と呼んでいたものである。本層は扇状地性の中～大円礫層で，しかも基質は淘汰のよい粗粒砂より構成されているため，松本盆地の深層地下水と深い関係を有している。本層は盆地中央部では，70～80mもの層厚を有するが，本遺跡が立地する盆地周縁部では，20～30mである。

この礫層の上位には，洪積世最末期の乗鞍火山の噴出に由来する波多ローム層が，風成



H：平出遺跡　t：崖錐性堆積層　P：古生層

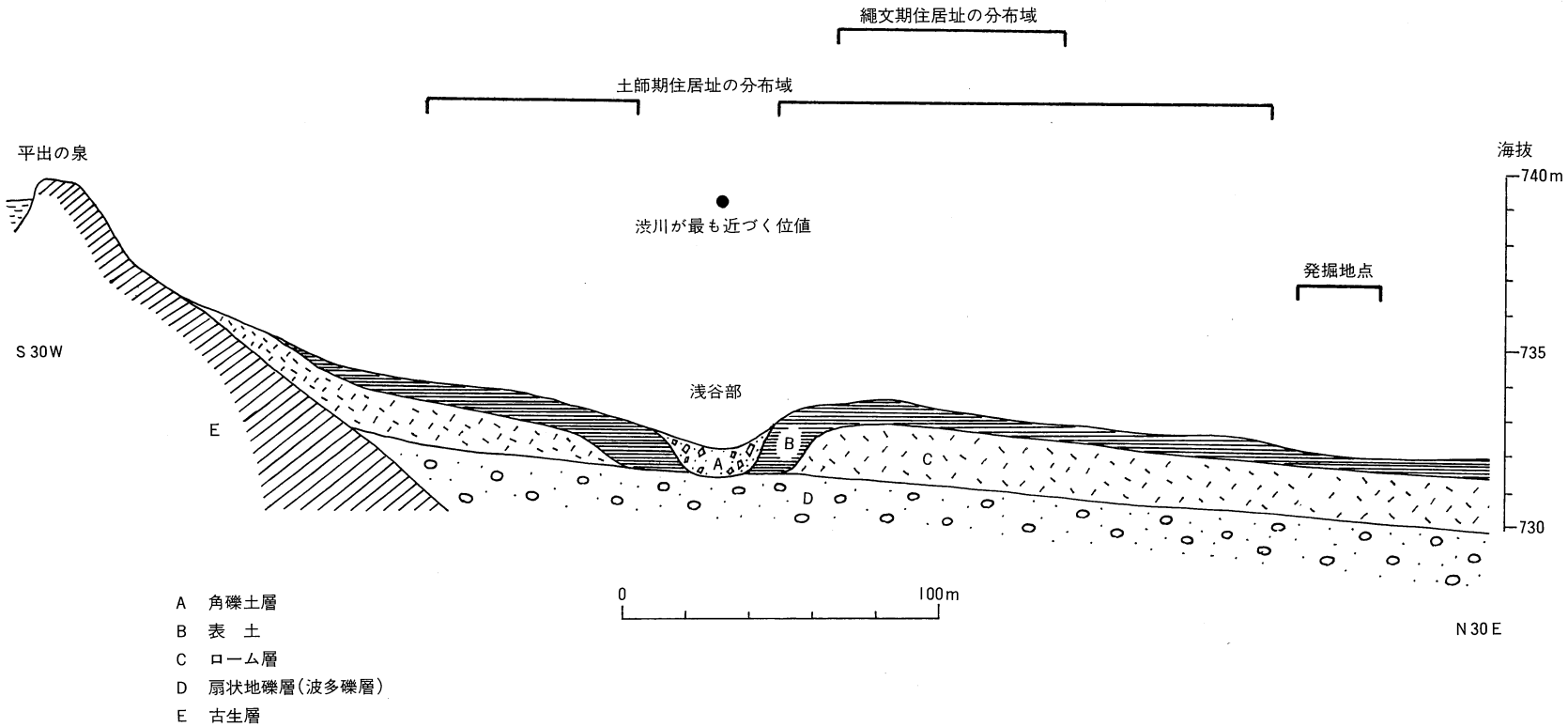
(1a)～(5b)：段丘面　番号は第1表と同様　u₂：(1)～(2)に相当　u₂：(2)～(4)に相当　u₃：(4)～(5)に相当　未区分段丘面

第5図　段丘面区分図（「塩尻」地質図幅説明書より）

ローム地形面と		標準区分*		鎖川 上流部 (a)	鎖川 下流部 (b)	奈良井川 (c)	小曽部川 (d)	塩尻東部 (e)
AII		(5)	押出面（はんらん原面）	小野沢面 (5a)	今井面 (5b)	太田面 (5c)	岩垂面 (5d)	
AI		(4)	上海渡面			郷原面 (4c)		
DuIIb	波田ローム	(3)	森口面	針尾面 (3a)	今井原面 (3b)			
DuIIa	小坂田ローム	(2)	波多面	古見面 (2a)		桔梗ガ原面 (2c)	長崎面 (2d)	柿沢面 (2e)
O	西林ローム	(1)						小坂田面 (ie)

*(1)は塩尻東部，(2)～(5)は梓川流域における区分

第1表　段丘面群の分類（「塩尻」地質図幅説明書より）



第6図 発掘地点と平出の泉を結ぶ地質断面図〔N30E－S30W〕（主として「平出」(1955)による）

でほぼ全部乗っており，その層厚は２～３ｍを測る。このロームは，鮮明な褐色を呈し，軽石片，スコリアはほとんど見られない。粒度はシルトに富み，砂，粘土に乏しく，真正のロームというよりはむしろ〝ローム質シルト〟に相当するものである。

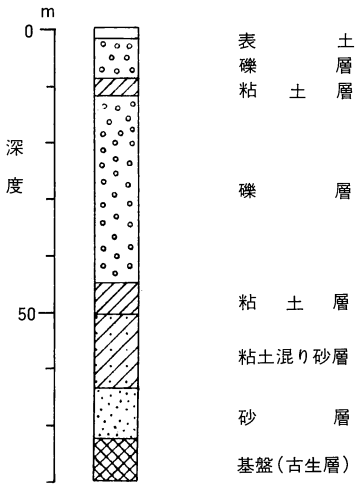
表土の黒色土層は，40～80cmの薄さで，それを覆っており，後世の耕作による攪乱がかなり下まで影響している。

背後の山地には，古生層が広く分布しており，その岩質は，硅質粘板岩，チャート，石灰岩，輝緑凝灰岩によって特徴づけられる。量的には遙かに硅質粘板岩が優勢であるが，この付近を特徴づけるものは，チャート相，輝緑凝灰岩相の著しい発達であり，石灰岩は比叡ノ山に見られるように，レンズ状の産状を呈する。

３．環境　―水理を中心として―

古代における水の価値観は，現代人のそれ以上のものであったろうし，また水の存在が古代人の生活条件や生活範囲を限定していたといっても過言ではないだろう。そのような意味からここでは，平出遺跡の水理条件を分析し，特に今回の発掘地点との関連性について触れていこうと思う。

深井戸柱状図によれば，奈良井川旧期扇状地の扇頂部に当る国鉄塩尻駅付近では（第７図），約75ｍ以深に基盤の古生層が存在し，それ以浅に帯水層となっている。帯水層は，約45ｍまでは砂礫質であるが，45ｍ以深は粘土質が卓越し，井戸１本当りの揚水量，水位降下などからみると透水性は低いものと考えられる。ちなみに，この桔梗ケ原一帯は，１井（径300㎜）の揚水量が500m³/day 以下の地帯である。



第７図　昭和電工塩尻工場内深井戸柱状図
（岸，他２名（1963）より）

地下水面は，地表下約20mの深さにあり，古代人はおろか最近まで，この地下水を利用することは技術的に不可能であった。加えて，このあたりの代表的な河川である奈良井川と田川の両河川も，遺跡との距離，比高を考慮すると対象外といえる。それにもかかわらずこの付近に古代平出の大集落が形成されたことは近くに平出の泉と，そこから流出する渋川の小河川があり，これらが飲用水として，そして灌漑用水として利用されたことにほかならない。

平出の泉は，比叡ノ山が分岐する首部にあり，平出考古館からはすぐ目と鼻の先である。この泉は付近の石灰岩の空洞に集まった伏流水が湧き出しているもので，毎秒40リットルの湧水量は，年間を通じてほぼ一定である。水質はアルカリ性であり，このことも桔梗ケ原の酸性火山灰土壌への灌漑水としては，効果が大きい条件となっている。渋川は，この泉の北側から流出し，部落の中で流れの向きを東にかえ，やがて塩尻の街を抜け田川へ流れ込む。用水規模の小河川である。

今回の発掘地点からは，平出の泉がS30Wの方向に380mを測り，比高差は8m，また渋川は，発掘地点に最も近づくあたりで180mを測る。縄文期の水の用途は，主として飲用水であるため，縄文期の住居址の北限（ヌ号址）は，かなり川に近くなってしまう。

第3図のほぼ中央に見られる浅い窪地は，床尾の泉から続き，山地と扇状地の境界沿いに集中した地表流水の浸食により形成されたもので，平出の泉から流下してきた渋川は，この東西方向の浅谷によって向きを東へ変えられる。この浅谷には，土質から恒常流水が流れていた様子はないが，古代においてはかなり湿潤な状態にあったと思わる。

土師期の住居址の分布は，この浅谷地帯を中心にして縄文期よりもやや北側まで拡張されるが，この浅谷よりも北側へ水を引き込むことは，地形上不可能であるため，おのずと集落の北限は決まり，そのような意味から自然環境の条件だけについて考えてみると，今回の発掘地点まで集落を拡張していくことは難しかったと思われる。

この付近は，松本平のうちでも高地にあり，またすぐ南側まで山地が迫っているために，零下10数度の最低気温が珍しくない厳冬となる。雪は少ないが，いにしえの生活ぶりは，おそらく我々の想像を絶するものであったにちがいない。

〈参考文献〉

小林国夫(1961)：いわゆる〝信州ローム〟，地質学雑誌，Vol. 67，No.784，p. 32～47。
岸和男・他2名(1963)：松本市およびその南郊に拡がる扇状地の地下水。地質調査所月報，Vol.14，No.3，p.15～40。
片田正人・礒見博(1964)：5万分の1地質図幅「塩尻」，および同説明書，地質調査所。

岸和男(1966)：長野県松本盆地水理地質図，および同説明書，地質調査所。
松本盆地団研(1972)：松本盆地の第四紀地質の概観，地質学論集，No.7，p.297～304。
塩尻市教育委員会(1980)：史跡「平出遺跡」遺構確認調査報告書　――昭和54年度――。

（鳥羽　嘉彦）

第2節　確認調査の要約

今回の遺構確認調査は，拡張区を含め合計60グリッドの発掘を行った。確認された遺構は，B－1を中心に検出された円形を呈すると思われる溝状の遺構1のみである。住居址等その他の遺構の検出は，全てのグリッドにおいて皆無であった。

出土遺物は，縄文時代，弥生時代，古墳時代～平安時代にわたっているが，出土数は概して少なかった。縄文時代については，縄文中期前半の土器片が主体であるが，他に縄文前期諸磯C式と後期前半の土器片が各1点出土している。石器は，磨製石斧1，打製石斧8，凹石3，磨石3，凹石兼磨石1，凹石磨石兼敲石1が出土し，他に黒曜石が出土している。弥生時代については，主に弥生中期庄ノ畑式の土器片が出土している。古墳時代～平安時代にかけては，土師器・須恵器が出土しており，土師器は，溝状の遺構から集中的に出土している。尚，出土点数・出土地区等の詳細は〔第2表〕を参照していただきたい。

（宮城　孝之）

第2表　地区別遺物出土表

	土器							石器					その他	総計
	縄文	弥生	土師	須恵	灰釉	不明	計	打斧	凹石	黒曜石	その他	計		
A－1	1		1				2					0	0	2
2	1					1	2					0	0	2
3	3						3			2		2	0	5
4							0					0	0	0
5	1						1			3		3	0	4
1	1						1			1		1	0	2
7	3		2				5	1			1磨斧	2	0	7
8							0	1				1	0	1
9							0					0	0	0
10	1						1					0	0	1
11							0					0	0	0
B－1	12	1	37	1			51		1	2		3	角釘1	55
B1拡1			45	4			49					0	0	49
2	4		58	1		2	65			1		1	0	66
3	8	1	22				31				不明1	1	0	32
4	1	3	9			2	15		1	2		3	0	18
5	2	1	58	4			65	1				1	0	66

	土器							石器					その他	総計
	縄文	弥生	土師	須恵	灰釉	不明	計	打斧	凹石	黒曜石	その他	計		
6	2		8	1		1	12	1			1磨石	2	0	14
7	3		7			2	12					0	0	12
8	1		4			1	6					0	0	6
9	6		25				31	1	1	1		3	0	34
10			16				16	1			1磨石	2	0	18
B－2	1		1				2		1			1	0	3
3	3		2				5			2		2	0	7
4	2		1				3			3		3	0	6
5	6		4				10		1	2	磨石1	4	0	14
6	4						4					0	0	4
7							0					0	0	0
8						1	1					0	0	1
9							0					0	0	0
10							0					0	0	0
11							0					0	0	0
C－4			2				2					0	0	2
5	6		6				12					0	0	12
6	2	1	1				4					0	0	4
7	2	1					0					0	0	0
8						1	1					0	0	0
9							0					0	0	0
10							0					0	0	0
11							0					0	0	0
D－1	10		1				11					0	0	11
2	4						4					0	0	4
3	5						5					0	古銭1	6
4	7	1					8	2				2	0	10
E－1	8		1				9			2		2	0	11
2	7		1				8					0	0	8
3	4		1				5					0	0	5
4	16		7				23					0	0	23
F－1	1						1					0	0	1
2							0					0	0	0
3	8		2				10					0	0	10
4			1	1			2					0	0	2
G－1	1						1					0	0	1
2							0					0	0	0
3	2						2					0	0	2
4						2	2					0	0	2
5	1						1					0	0	1
H－1							0					0	0	0
2	6		1				7					0	0	7
3							0			1		1	0	1
4						1	1					0	0	1
5	15		5				20					0	0	20
合　計	169	9	329	12	0	14	533	8	5	22	5	40	2	904

第３節　遺跡の層序

調査地区の全体地形は東に向かって緩傾斜をなしており，最西部（最高所）と最東部(最低所）のグリッドの距離は 330 mほどで，その比高差は10ｍあまりである。全体的に上層の厚薄はほぼ一定で，層位はＢ１を中心とする溝状遺構の地域を除いて，Ａ～Ｈ各グリッドとも基本的にはほぼ同じ状態を示している。ここではその基本的な層序について記述し，Ｂ１を中心とした地域の層序については第Ⅲ章を参照していただきたい。

表土層（耕作土）からローム層までを含めⅠ～Ⅲ層まで分層することができた。

Ⅰ層　黒褐色～暗褐色を呈する表土層（耕作土）で厚さは15～25cmで，わずかながら耕作土層の下部でローム粒が認められる。遺物は非常に少ない。

Ⅱ層　褐色土層で粘りはロームとあまり変わらず，表土層とは明確に区別できる。厚さは10～20cmと薄いが，遺物の出土はこの層を中心としている。

Ⅲ層　ローム層

以上のようであるが，全体的にはローム層までの上層は35cm前後と薄い。なお，Ｄ～Ｆ－２～４グリッドではⅠ層とⅡ層との間に割合かたい茶褐色の土層が認められたが，他の地域にはなく，極地的なものと思われた。

全体的に今回の調査地区はローム層まで浅いということもあって，耕作機械による攪乱が著しく，ほとんどの地区でローム層にまで攪乱が及んでいた。

（大竹　庄司）

第Ⅲ章　遺構・遺物

今年度の確認調査によってその存在が確認された遺構は古墳時代に属すると考えられるＢ１区検出の溝状遺構のみであった。出土遺物は縄文時代に属するものでは，縄文土器片169,打製石斧８，凹石５，黒曜石22，磨製石斧１があり，弥生時代では弥生土器片９が，また古墳～平安時代にかけては土師器片329,須恵器片12がそれぞれ出土した。これらの遺物の大半はＢ１を中心とした溝状遺構から出土したものであり，他地区では遺物の出土は極めて僅少であった。なお，従来平出遺跡から多出していた灰釉陶器は破片１片すらも出土を見ておらず注意された。

以下遺構を中心として記述を進めたい。

第１節　溝状遺構

遺構(第８図)　溝状遺構は最初Ｂ１グリッド掘り下げ中に幅 1.8 m，深さ30cm程の落ち込みが発見され，しかも他所と比較してこの落ち込み部分からの遺物の出土が多かったことから何らかの遺構であろうと考えられた。このためこの溝状遺構の性格を追求するため東西に５ m，南に３ mの拡張を行った結果，孤を描く溝状の遺構であることを確認した。

この遺構が発見された場所は，今回の遺構確認調査区域では最も西側の地域にあたり，また昭和20年代の調査時の第14号住居址の東11ｍ，復原家屋（第３号住居跡）の北方26ｍの地点でもあり，平出遺跡の中では最も北寄りに発見された遺構ということになる。

溝状の落ち込みは，15cmの耕作土層を除去し，更に15cmの黒褐色土層を取り除いたところ，幅 1.8ｍ程の落ち込みが認められ，更に掘り下げを行うとⅢ層のローム混入褐色土からⅥ層ローム混入黒色土までレンズ状のきれいな堆積状態を示し，ローム層に達していた。しかし，遺構面まで地表より30cmと浅いこともあり，耕作時の攪乱はかなり著しく，溝状部分以外，特に溝状の内側の平坦面はローム面にまで攪乱が及んでいた。

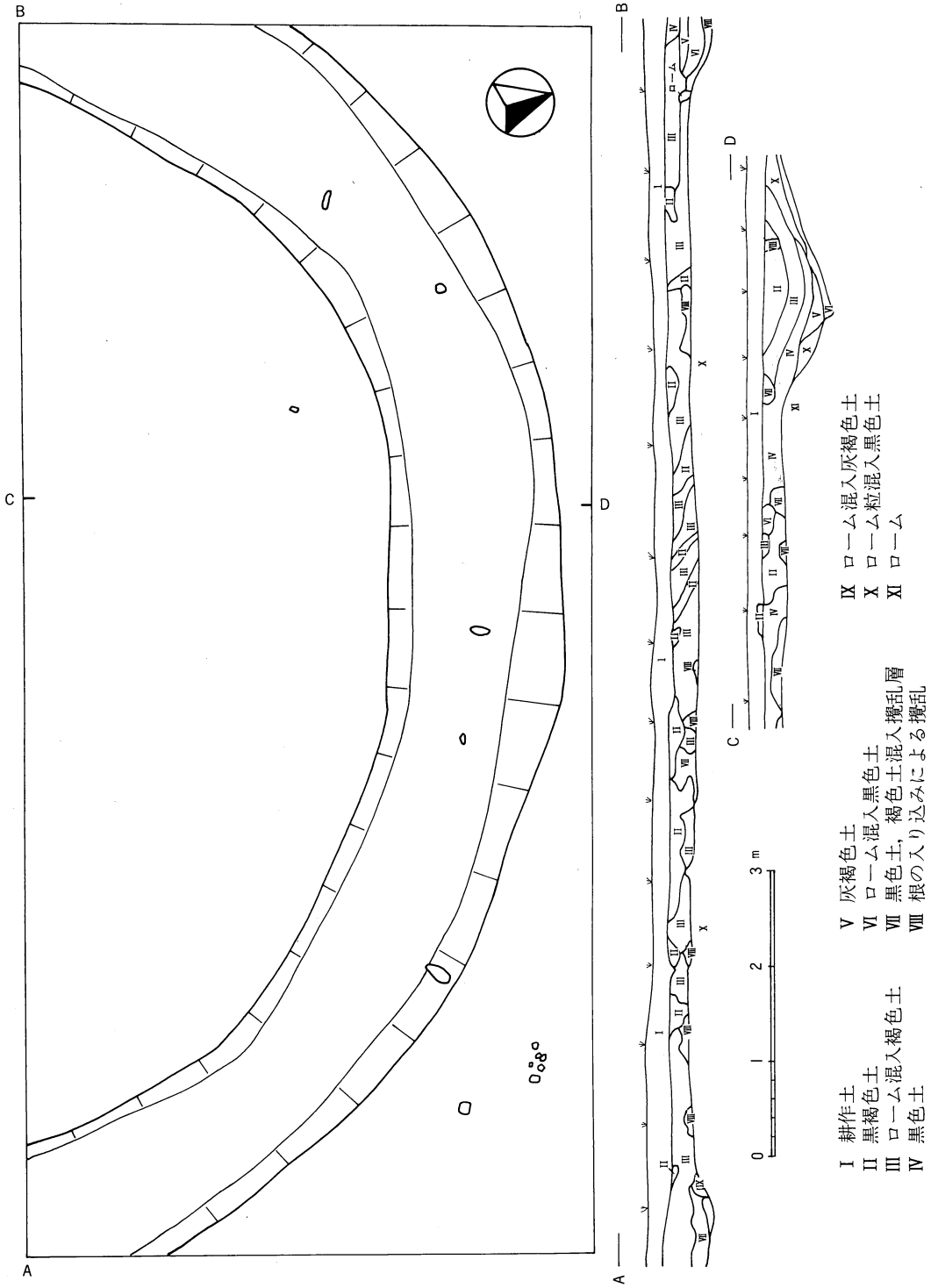
遺構のプランは，南側が果樹園のため調査不可能であったことから，北側部分を露呈したにとどまりその全容を摑むまでには至らなかったが，今回調査区域の状態から推測して溝状の遺構はほぼ円形を呈しているものと考えられる。もし円形を呈しているものとすれば溝外周直径15.5ｍを計る規模を有するものとなり，今回の調査ではその約３分の１を露呈したことになる。

溝の幅員は1.9～1.5m，深さ34～18cmである。幅員は概して一定の幅を有するが，深さは一様ではなく，起伏が目立つ。中央部が深く，東・西になるにつれて浅くなっている。溝の掘り込みは明確なＶ字状，Ｕ字状を示さず，内周の壁はほぼ一様に急角度で立ち上がっているが，外周壁はダラダラとした掘り込みとなっている。底面は中央部分では堅く良好であったが，他の部分は軟弱であった。

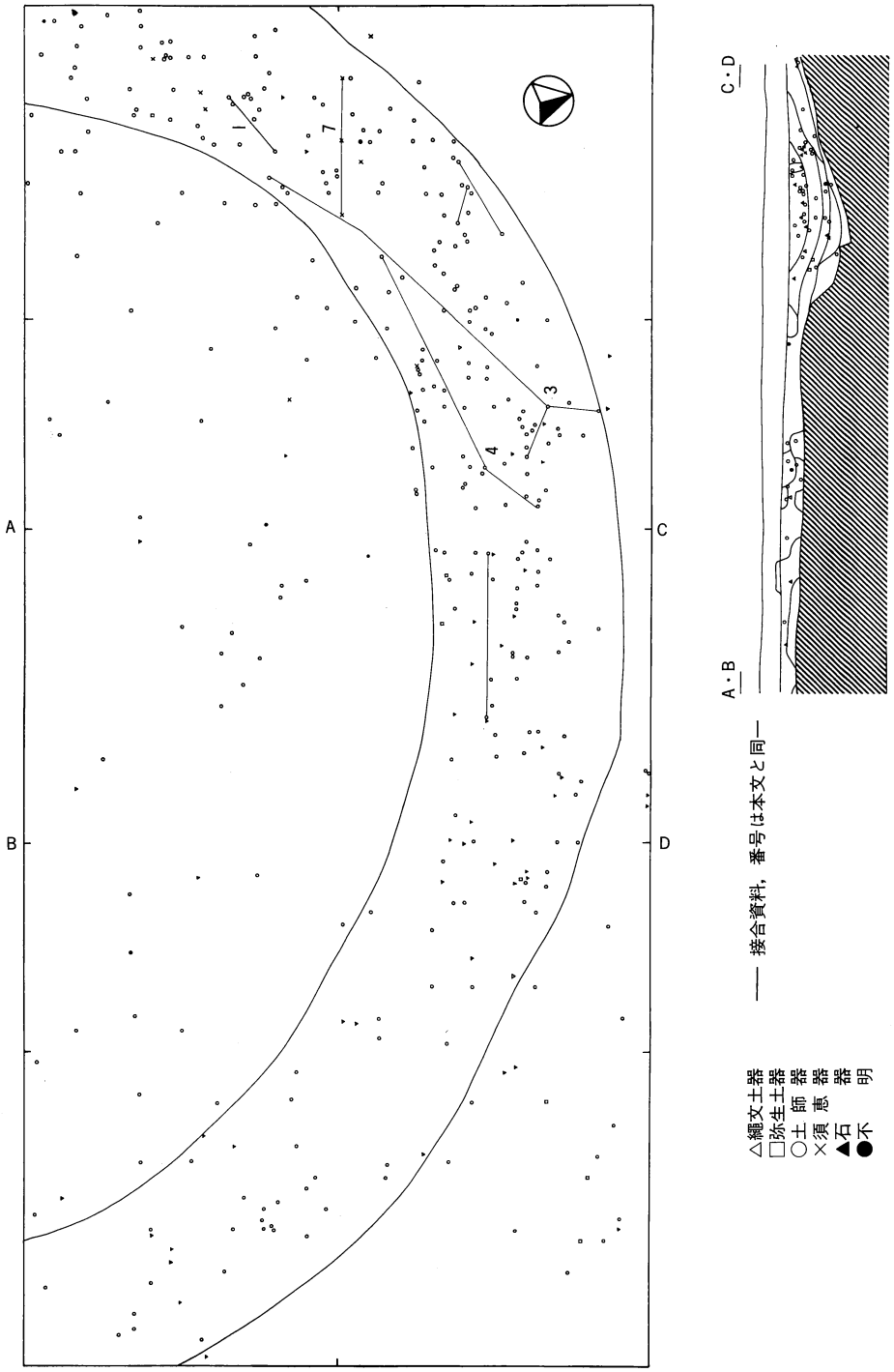
溝の部分から大小５個の自然石が発見され，大は30×14cm，小は10×８cmのものであった。それぞれ溝底面より20cmほど浮いており，ちょうど第Ⅲ層上面にあたる深さから出土している。したがって溝状遺溝との直接の関連性はないものと考えられる。

次に溝の内側の平坦部分であるが，きれいに平滑になっており，円形円周墓あるいは古墳における主体部のような遺構は何ら発見されなかった。

最後にこの遺構の年代であるが，遺物の項で述べているように，５世紀後半から６世紀


A
B
C
D
0
1
2
3 m
Ⅰ 耕作土
Ⅱ 黒褐色土
Ⅲ ローム混入褐色土
Ⅳ 黒色土
Ⅴ 灰褐色土
Ⅵ ローム混入黒色土
Ⅶ 黒色土，褐色土混入攪乱層
Ⅷ 根の入り込みによる攪乱
Ⅸ ローム混入灰褐色土
Ⅹ ローム粒混入黒色土
Ⅺ ローム

第8図　溝状遺構（1：70）



第9図　溝状遺構遺物出土状態（1：70）

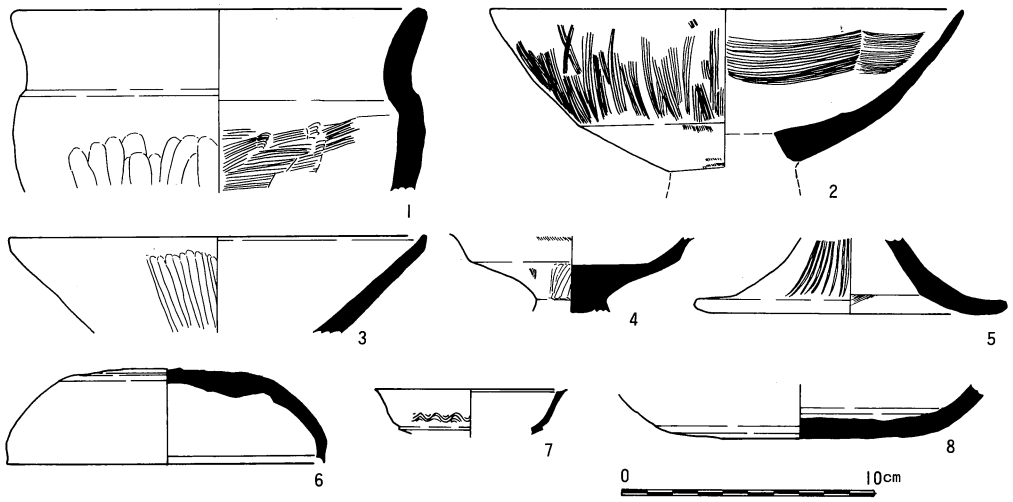
平出第２様式から第３様式に該当するものと考えられる。

（小林　康男）

遺物（第９・10・11図）　遺物の出土は，平面的には第９図に示すように，溝状遺構の上面および内部を中心としており，南側の平坦部は僅少であった。縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，中世土器，打製石斧，凹石等が出土している。

本遺構はその量の多さから土師器が中心になる時代のものと考えられる。したがって最初に土師器からみていきたい。なおこの遺構に確実に併うものは第10図２のみであるが，覆土遺物についても併せて記述したい。

土師器（第10図）　１は周溝覆土から出土した２片が接合した甕形土器である。口縁部から胴上半部が現存している。色調は明褐色を呈し胎土に石英微粒を含み焼成は良好である。口径16.5cm，現在高７.２cm，厚さ10mm前後を計り，最大径は口縁部にある。器形は胴部から一段段をつけてくびれ，口縁に向って緩やかに外反している。口縁部はヨコナデを行い，胴外面は縦方向にヘラ削りを行い，内面はヘラ状工具により横方向にナデを行っている。２は周溝外側より上を向いて出土した高坏形土器の杯部である。淡褐色を呈しているが底部断面は淡黒色を呈している。胎土は少量の石英粒を含んでおり軟い焼をしている。口径18.6cm，現在高 6.4cmを計る。厚さは13～３mmで口縁部にいくほど薄くなっている。底部



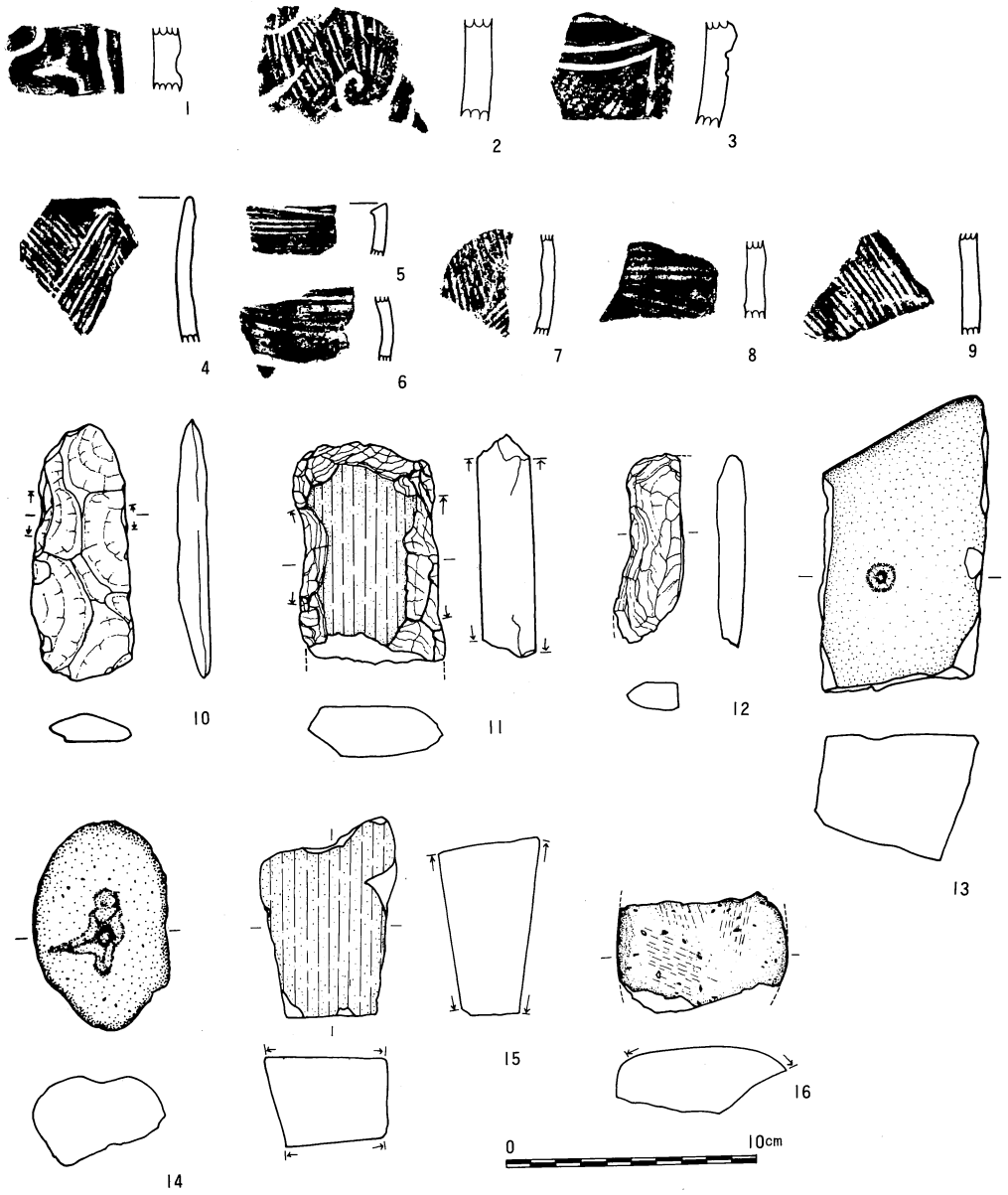
第10図　溝状遺構出土土器（１：３）

から口縁部に向って大きく開いており，底部から⅓程の所で軽く段をつけている。口縁部内外はヨコナデを行い胴外面は縦方向にハケ状工具によって調整を行っている。胴下半はヘラ磨が顕著である。胴内面は上部に横方向のハケ状工具による調整がみられ下半は丁寧なヘラ磨がみられる。３は周溝覆土から出土した５片が接合した高杯口縁部の破片である。胴赤褐色を呈し胎土焼成ともに良好である。口縁は16.6cm，現在高は 3.3cm，厚さは５mm前後である。口縁はヨコナデを行い，胴内外は丁寧なヘラ磨を行っている。４は周溝覆土から出土した３片が接合した高杯杯底部の破片である。黄褐色を呈し焼成は良好である。杯部外面には顕著な段がみられる。外内ともヘラ磨を行っている。ヘソの痕跡がみられる。５は周溝覆土から出土した高杯の脚部破片である。明褐色を呈し胎土には微砂を含み焼成は良好である。脚径16.4cm，厚さは７mm前後である。ハの字状に外反し，内面には段を有する。脚縁部はヨコナデを行い，外面は縦方向にヘラ磨を，内面は横方向にヘラナデを行っている。

須恵器　６は周溝覆土から出土した３片が接合した須恵器杯蓋である。淡青灰色を呈し，断面は淡紫色を呈している。胎土には少量の微砂を含み焼成は良好である。口径は12.6cm，器高は 3.8cm，厚さは４mm前後である。天井部から口縁部にかけて丸くなだらかなカーブを描いており稜ははっきりしていない。口縁端部には内傾する段を有している。マキアゲ，ミズヒキ成形で天井部外面の調整は回転ヘラ削りによっておりほぼ½である。７は周溝覆土から出土した須恵器𤮈口縁部破片である。暗青灰色を呈し焼成は良好である。頸部と口縁部との間には稜があり，そこから端部に向って緩やかに開いている。口縁部は内傾する段を有している。厚さは２mm前後と薄く作られている。口縁部には波状文が描れている。８は周溝覆土から出土した須恵器壺底部破片である。青灰色を呈し焼成は良好である。底部は平らである。外面は回転ヘラ削りである。内面は自然釉がかかっている。

時期は２・３・４・５・７が５世紀後半，平出第２様式，１・６・８が６世紀，平出第３様式に位置づけられる。　（篠宮　正）

縄文土器（第11図）　縄文土器は39片の出土があったが，その殆んどが小破片で，比較的大きなものは１～３の３片のみであった。１は隆線を蛇行して降下させている。黄褐色を呈し，焼成は良い。２は綾杉状の粗い沈線文を地文とし，沈線による渦巻文が描かれている。砂粒を少量含み，焼きは軟弱である。３は隆線の内側に波線文の区画文を描き，その中を縄文で埋めている。砂粒を含み，焼成は余り良くない。これら３片の土器片は中期中葉から後葉に属するものであろう。



第11図　溝状遺構出土遺物（1：3）

弥生土器（第11図）　弥生土器は8片得られた。4は甕形土器の口縁部破片で，黒褐色を呈し，器壁堅緻で焼成は良い。綾杉状に条痕文が施されている。5も口縁部の小破片で口唇上面はやや肥厚している。平行に条痕が施文されている。黄褐色を呈し，焼きは軟弱である。6は5mmと薄い器厚で，赤褐色を呈し，条痕がみられる。7～8も6と同様で7・9は斜行して，8は平行に施文されている。いずれも表面に炭化物の付着が認められる。

これらの弥生土器は中期初頭に位置づけられるものである。

石器(第11図) 10～12は打製石斧で，10は完形品，11・12は欠損品である。10は頭部がやや尖り，刃部は丸味を帯びる。肩の部分は，幅1～1.8cm磨耗している。58g。11は刃部を欠くが，部厚い石斧で，やはり肩の部分が磨耗している。190g。12はその大半を失っているが，石斧の左辺半分であろう。30g。13～14は凹石で，13は表裏に浅い1孔ずつを有し14は表面に不規則な1孔を持っている。14は表面の大半を欠損している。13は580g。14は162g。15は磨石ないし砥石と思われるもので，磨痕は余り顕著ではない。238g。16は磨石ないしは磨製石斧の一部で，その大半を失っているのでどちらとも決し難い。非常にたんねんに研磨されている。98g。

性格 以上，遺構，遺物の概要を述べたが，最後にその性格について簡単に触れておきたい。

今回発見された円形の溝状を呈する遺構には，単なる溝であるとするものの外に，次の2つの可能性が考えられよう。1つは円形周溝墓であり，1つは墳丘が削平されてしまった古墳の周溝である。今，県下で類似の調査例をみると，円形周溝墓には下伊那郡喬木村帰牛原，諏訪市本城，飯山市照里等が知られ，後者には本城等がある(注1)。このような類似例をみると，円形周溝墓にあっては，周溝内より土器の出土があり，また鉄製刃子などを持った主体部の発見もなされている。また古墳については，主体部の痕跡が存在し，その部分から直刀，刀子などの副葬品の発見がなされている。時代は円形周溝墓に関しては五領—和泉期に該当しているようである。このような事例を参考にすると，今回の平出の調査例は，円形周溝墓とするには主体部の発見もなく，副葬されたと思われる遺物の出土もないというように，余りにそれを裏付ける資料に乏しい。しかし古墳とするにも同様に不明確である。しかし，平出遺跡の北辺「昭和電工塩尻工場の一角に数基の古墳が存し，遺物も若干発見されている」(大場1955) というように，遺跡の北辺には古墳の存在も予想され，今回のこの遺構も古墳の基部であるとする考え方も捨て難い。

また，ここで注意しておかなくてはならないことは，昭和24年の発掘調査の際，3号住居址の北方27mの地点に，明確さを欠き最終的には昭和30年の本報告には削除された零号住居址が発見されているということである。信濃2—1に掲載された報告からその部分を抜すいしてみよう。「ボーリングにより炉址を発見して発掘す。地表下約五〇糎，砂岩質の石組式で，なかに花崗岩の礫1個の外，砥石の破片もまじっているが，皆赤く焼けていた。出土の土器は全部土師器で，小形の甕四個分，内一個は下向きになっていたが，その

原形は崩れていた。須恵器としては，瓶一個（破片）発見したにとどまる。……附近をボーリングしてみたが，竪穴の壁を発見できなかった。……或は平地住居であるのかも知れない。」(大場・原1950)。今回の溝状遺構との正確な位置関係は不明であるが，あるいは何らかの関連性があるのかも知れない。

いずれにしても今回の調査では，南方向にまだ遺構部分を余りに多く残しているため，その地域の調査をすることなしに早急な結論は避けるべきであり，後日の調査の結果を待ちたいと思う。

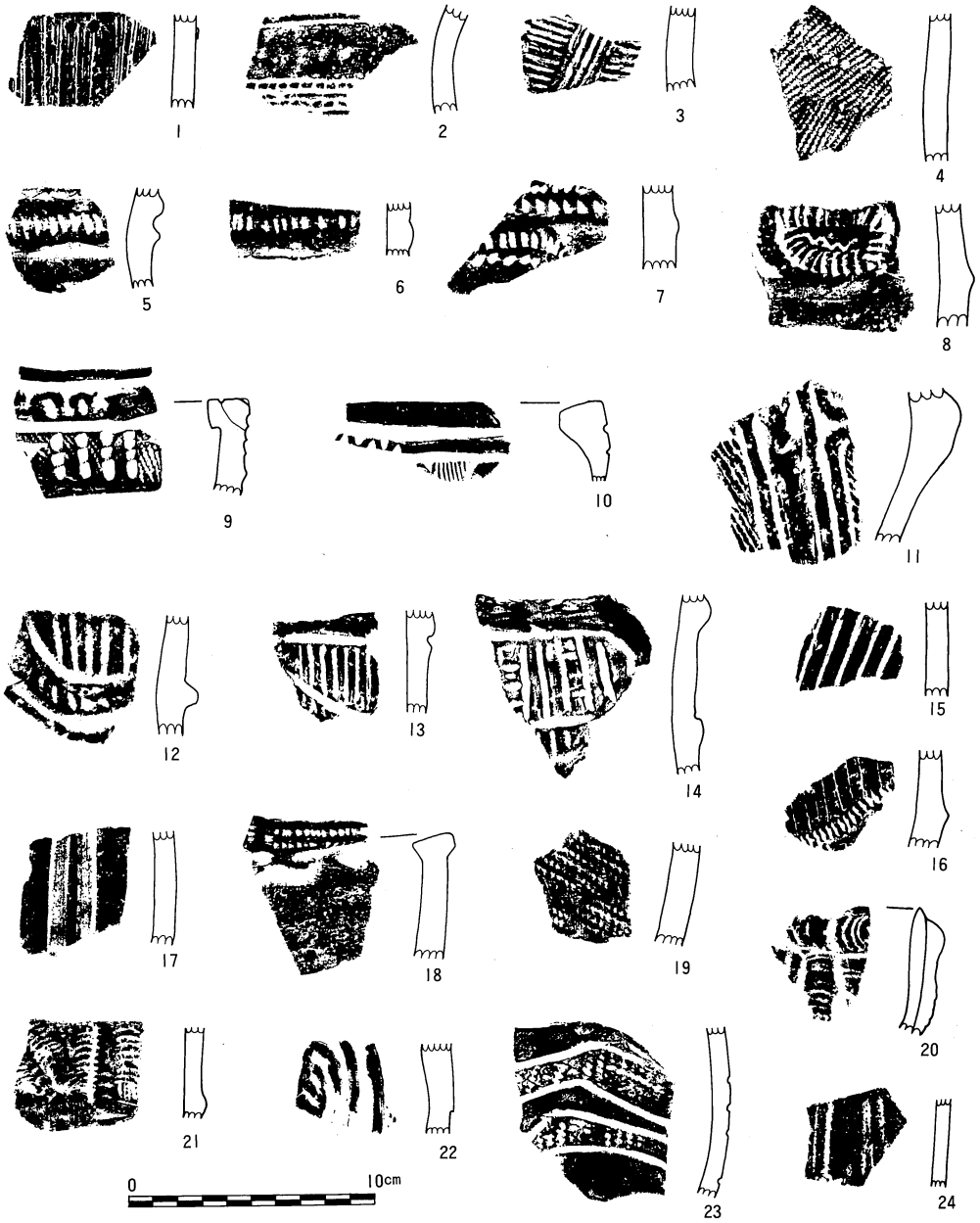
〔注１〕 県下の円形周溝墓・方形周溝墓の資料収集・分析は宮坂光昭氏によって行われており，中部高地の考古学（1978）に詳しい。

（小林　康男）

第２節　遺構外出土遺物

遺構外の出土遺物は縄文時代の土器片がその大半を占めるが，そのほとんどが小さな破片の出土におわっている。以下出土遺物の概略を述べていきたい。

第12図１は細い沈線の上に２つのボタン状の突起をつけた諸磯Ｃ式に比定される土器片である。Ｄ－４出土。２は無文帯をはさんで上部を沈線で，下部を２本の半截竹管による連続爪形文を付している。Ｈ－５出土。３は数条の斜向沈線を直交させており胎土には石英砂を含む。Ｂ－３出土。４は胎土がよく，表面はきれいに縄文で調整されている。Ｆ－３出土。５・６は２本の隆帯の間を半截竹管か円形竹管状の施文具の外側で連続刺突している。５はＥ－１，６はＢ－４出土。７は半截竹管状の施文具によって強く連続刺突文が付されている。８は楕円状に太い隆帯をめぐらしその内側に連続刺突文をめぐらして中央にジグザグの沈線を付している。Ｆ－１出土。胎土は粗いが表面調整は良い。Ｅ－４出土。９は厚い口縁部で深い２本の沈線がはしり，その間の隆帯に一部交互刺突がなされている。Ａ－３出土。10は胴部の最も張り出した部分と思われ，縦に４本の深い沈線がはしり，空白部を縄文でうめている。Ａ－３出土。11・12は櫛形文である。半円形に隆帯をめぐらし，その中を縦の平行沈線でうめ，隆帯に連続した刺突を加えている。11はＡ－７，12はＤ－２出土。13は楕円形に太い隆帯をめぐらし，その中を平行沈線でうめ，２行の沈線の間に刺突文を付している。Ｅ－２出土。14は棒状工具により等間隔に沈線を付している。Ｂ－５出土。15は細い棒状工具で縦に沈線を引き，連続刺突を加えている。Ａ－１出土。16はヘラ状工具で２本の浅い沈線を引いている。胎土は良い。Ｅ－２出土。17は器厚が厚く口縁かどに指圧痕文を作り，口唇部に細い２行の連続刺突文を付している。Ｄ－３出土。18



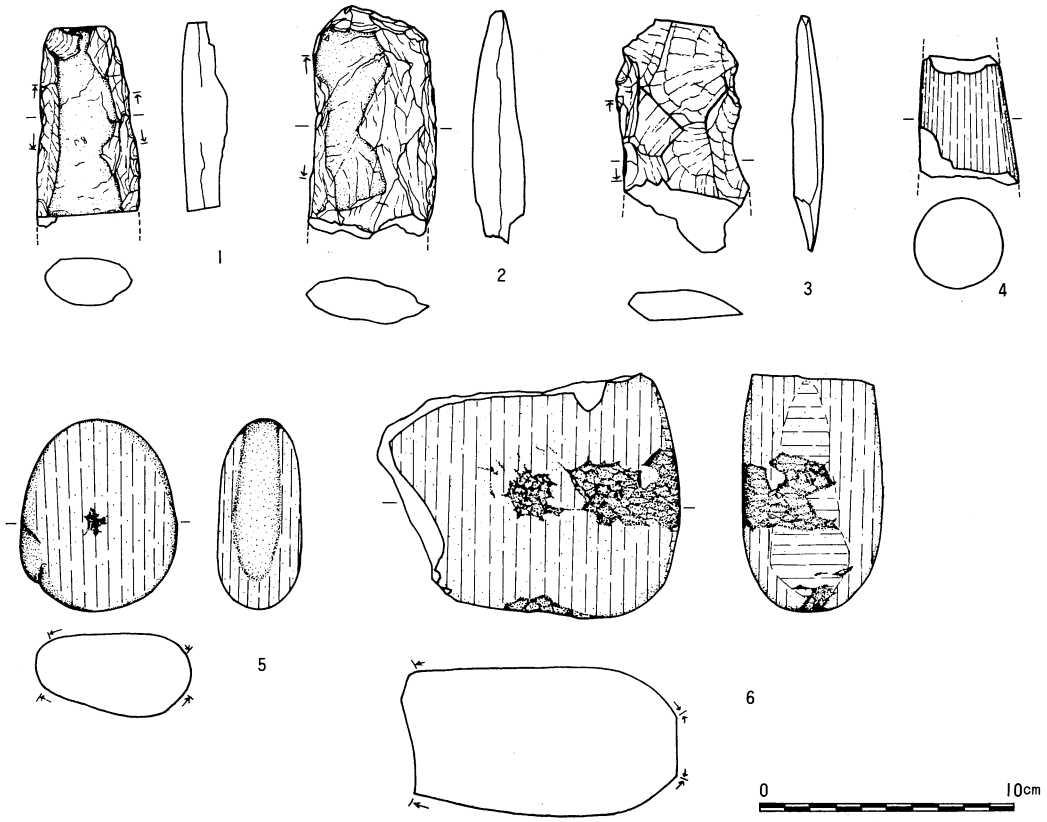
第12図　遺構外出土土器（1：3）

は表面調整が良い。A－3出土。19は太い隆帯の上に連続爪形文を付しT字状に交差させている。E－2出土。20は隆帯のすぐ脇に連続爪形文を付している。E－2出土。21は細い粘土紐を貼りつけ焼成も良好である。H－5出土。22は器厚が一定しており，沈線の区画内に縄文を充塡している。縄文時代の後期前半に比定される。B－6出土。23は縦に浅

い沈線を引いた焼成の悪い弥生土器で遺構外ではD－4出土の小破片とともにわずかにこれ2点のみである。C－6出土。

石器（第13図）は，打製石斧3，磨製石斧1，凹石兼磨石1，凹石磨石兼敲石1が出土している。1・2は刃部を欠き，原石面を多く残している。1は重量82g，2は110gでともにD－4出土。3は刃部を欠き，薄い。重量50g，A－8出土。4は乳棒状石斧の中央部で表面は粗い。重量111g，A－7出土。5は片面にのみ浅い凹孔を有し，側縁の一部をのぞき良く研磨されている。重量211g，硬砂岩製，B－5出土。6は片面にのみ不明確な凹孔を有し全面研磨されている。側縁に打痕が認められる。重量1058g，硬砂岩製，B－2出土。

（宮城　孝之）



第13図　遺構外出土石器（1：3）

第Ⅳ章　遺跡の北限

今回の調査の目的であった平出遺跡の北限について，遺構の分布，遺物の出土状況によって考えてみたい。

まず遺物の出土状況からみてみよう。調査区域の最も東側の地域に設定されたＤ～Ｆ１～４グリッドでは遺物の出土は何も出土しなかったＦ２から23片の出土をみたＦ４まであるが，その殆んどが10片以内の出土であり，量的には極めて少量であったといえよう。しかもその出土遺物は磨耗が著しく，また小片のものが大半を占めている。次の中央部分に設定されたＧ～Ｈ１～５では各グリッドとも出土は少く，０～２片が主体で，Ｈ５のみ20片の出土があった。また最も西側に設定されたＡ～Ｃ１～11では溝状遺構が確認されたＢ１およびその拡張区で365片と集中的に出土したのを除くと他の大部分のグリッドでは10片以内の出土であり，遺物の出土がなかったものも11グリッドに達している。以上のように遺物の出土は，Ｂ１を中心とする地区に集中し，他の地区では極めて僅少であったことが判明した。しかもその出土遺物は大半が２㎝内外の小破片であり，遺物の出土状態から考える限りでは今回の調査地域は集落地帯外縁部に属することを強く示唆するものと思われた。

では遺構の分布から見た北限はどうであろうか。今回の調査では調査区域最西端のＢ１グリッドを中心として溝状遺構を１ケ所確認したのみであった。昭和20年代の調査では，溝状遺構の南方26ｍに復原家屋が建築された第３号住居址があり，南方11ｍには第14号住居址が発見されている。しかし，この第14号住居址の北側には３本のトレンチが入れられているが何の遺構も検出されていない。またＡ～Ｃ７～11，Ｄ～Ｅ１～４，Ｇ～Ｈ１～５周辺にも遺構の確認はなされていない。したがって遺構の分布面からみても，今回の調査地域は平出遺跡の北辺をなした地帯であり，集落はより南側の地域にあったことが確認されたといえよう。

では次に時代別に集落の北限を考えてみよう。まず縄文時代であるが，Ｉトレンチチ号住居址，Ｒトレンチワ号住居址，Ｏトレンチヌ号住居址を最北とし，それより南方に集落は展開していたと考えられる。これらの検出された住居址以北では土器等の出土遺物も極めて少く，しかも少片で磨耗したものが多いことから，前述の住居址以北は居住地域とはならなかったものと推測される。

次に弥生時代であるが平出遺跡ではこの時代の遺構は未発見であり，わずかな遺物の散布が認められる程度である。今回の調査でも溝状遺構に伴って，８片ほどの小破片が出土しただけであったが，南方60ｍのＯトレンチおよび第34号住居址を中心として弥生土器の出土があったことが報告されているので，Ｏトレンチから今回の調査地区までの間にあるいは弥生時代の遺構が潜んでいる可能性は充分考えられよう。とにかく弥生時代に関しても今回調査地区よりも，もっと南方にその中心地が存在したものと予測できる。

最後に古墳～平安時代を見てみよう。今回調査の溝状遺構とＤトレンチ内の第14号住居址とが最も北側に位置する遺構であり，他のＡ～Ｈ各グリッド周辺では遺構の発見は全くなく，遺物の出土も少い。したがって古墳～平安時代にかけての集落は，第14号住居址・溝状遺構を最北限とし，これより南側に展開していたものと考えられる。少くとも今回の調査区域までは集落は伸びていなかったと思われる。現在，遺跡地にある復原家屋は平出遺跡の中心地に存していたのではなく，かなり北に片寄った所に位置した住居址であったということができる。平出遺跡の中心はむしろ，この復原家屋から南側，平出の泉にかけての地帯にあったといえよう。このことは昭和20年代の調査報告においても既に述べられており，今回の調査はそれを再確認する形となった。

以上のように各時代にわたって集落の北限について記述してきたが，各時代毎若干の異なりは認められるものの凡そ復原家屋（第３号住居址）周辺をもってその北限と限定できそうである。このような集落の北方への展開は第Ⅱ章，第１節の水理を中心としての環境の項で述べられているように飲用水，灌漑用水としての平出の泉およびそれより流下する渋川による規制が大きかったものと考えられる。この平出の泉・渋川との距離が集落の立地条件をかなり強く規定していたものと思われる。このような意味においても，今回調査された地域は平出の北のはずれの地域であったと結論づけることが可能であろう。

（小林　康男）

第Ⅴ章　結語

平出遺跡の主要部分を確認するための調査は，昨年度につぎ，今年度も前章記載のごとく実施され，担当委員の報文に詳しく述べられている。

今まで平出遺跡の中心部は，復原住宅（土師式第３号址）を中心とする地帯と想定してきたが，そのことは今次調査によっても明白にされてきたと信じたい。

この第３号住居址は昭和24年の予備調査の時に確認されていたが，本格的調査にはいった同25年に再度発掘され詳細な調査が行われ，平出遺跡の中でも他にみられない内容をもつものであることが確認された。

その結果は通常の土師住居址とちがった内容をもっており，古墳時代以後平安時代にかけての庶民住宅として今まで発見されていない内容をもっていた。それは内部構造において，４本の主柱と周縁部外の24本の軒の支柱，またその内側に54本の壁を支える小柱があり，床面の東部には粘土製のカマドと屋外に通ずる煙道が残っていた。またカマドを中心に２個の貯蔵穴，その横に石柱などがあり，出土の遺物には粘板岩製の紡錘車も発見されており，その遺構の状態をよく残していた。一度火災に逢ったこの住居は，竪穴の内部周辺が赤く焼けかためられており，壁の支えにつかった小板の跡までが確認されうる程であった。この第３号住居址を中心に，その南方Ａ・Ｃトレンチ（凡そ60ｍ）には，10基もの縄文・土師の竪穴が複合してあり，その東のＢトレンチ（20ｍ）からは，第11号住居址のような径11ｍ余の土師式竪穴最大のものが発見されている。これらの分布する地帯に近いＰトレンチ（東西40ｍ）からはなお12基もの縄文・土師竪穴が集中しており，この地帯を全面発掘した場合は正に100基近くの竪穴発見は可能と推定される。

しかし，第３号住居址の西10ｍをへだてて南北に入れられた80ｍ余のＤトレンチからは，僅か２基の土師式竪穴を発見したに止まり，第３号住居址以北にはこの２基のほか，関係遺構は発見されていない。

今次の確認調査は，なお念のため，第３号住居址の北部地帯を確認するためなされたものであるが，予想どうり，これ以上の住居址の確認はされなかった。立地・土層の条件からすると，水利に不便であることのほか，竪穴密集地帯と余り変らぬ地帯であるので，その理由を水利不便のためと考えたい。現在の平出部落が，平出泉の流出地と流路に集中しており，縄文・土師の住居が，北部の丘上の地帯に密集している理由は，住宅を建設する技法の上において，竪穴式の住宅は，流路近くの湿地帯には不可能であり，水の不便はあ

るものの，この地が最適の地であるため，永年に及び住居地帯となっていたものであろう。

土師式最大の第11号住居も前記したように規模において特殊なものであるので，これらを含めての地帯を中心地とみたい。

中世においては，平出の集落は現在の水路近くに移るが，その過程において，この遺跡地帯から現在地に急に移転したものでなく，中間の地帯を経て移動したもので，その証として,「かいと」・「容かいと」・「袖がいと」・「清水がいと」・「くぼがいと」・「次良がいと」などと中世の住宅関係の地名が，江戸時代の検地帳に残っていることによっても知られる。このように水利は生活の根底であるが，遺跡時代には，住宅をつくる都合から止むなく水源地と遠く住居地帯を営む場合があったのである。

今次調査において，この地帯以北に遺構（住居）の発見されなかったことは予想どうりであった。すなわち遺跡の北の限界地帯をここと考えることは至当であろう。要するに土師時代以前の集落は，平出泉から出て，東に流れる水路と，旧中山道（現国道19号線）とに挾まれた丘陵の中間で，しかも水便のよい地帯に営まれ，その集落に附随する墓地地帯は外に，原始の神々をまつる信仰の地帯は，集落の中，またはその周辺の然るべき地にあったであろう。今までの考古学的調査により得た知見によると，例の緑釉の水瓶(県宝)の発見された地点，牛骨の埋葬されていた第44号の竪穴，子持勾玉の出土したQトレンチの第42号竪穴などは，いずれも集落の中心から離れた地域に分布している。緑釉の水瓶は平出遺跡にとって重要な遺物であるが，現在のところ竪穴住居址からの出土とは見なされず，口縁部が意識して欠損されていたこと，出土の地点が墓地地帯と推定されることからして，骨蔵器（火葬骨用に転用）として埋蔵したものとみられる。

今次調査で発見された遺構の地も，平出泉からの流路から,共に150m～200mはなれた丘上にあり，決して中心地帯ではないのである。出土した遺物の種類は，第Ⅲ章記載のごとく，縄文時代に属するもの，弥生時代に属するもの，また歴史時代に関わるものと多種多様であるが，その主となるものは古墳時代から平安時代にかけてのものが圧倒的に多い。これは数100年に及ぶ農耕のための攪乱と，当時の人々の生活行動の範囲内であったからであろう。

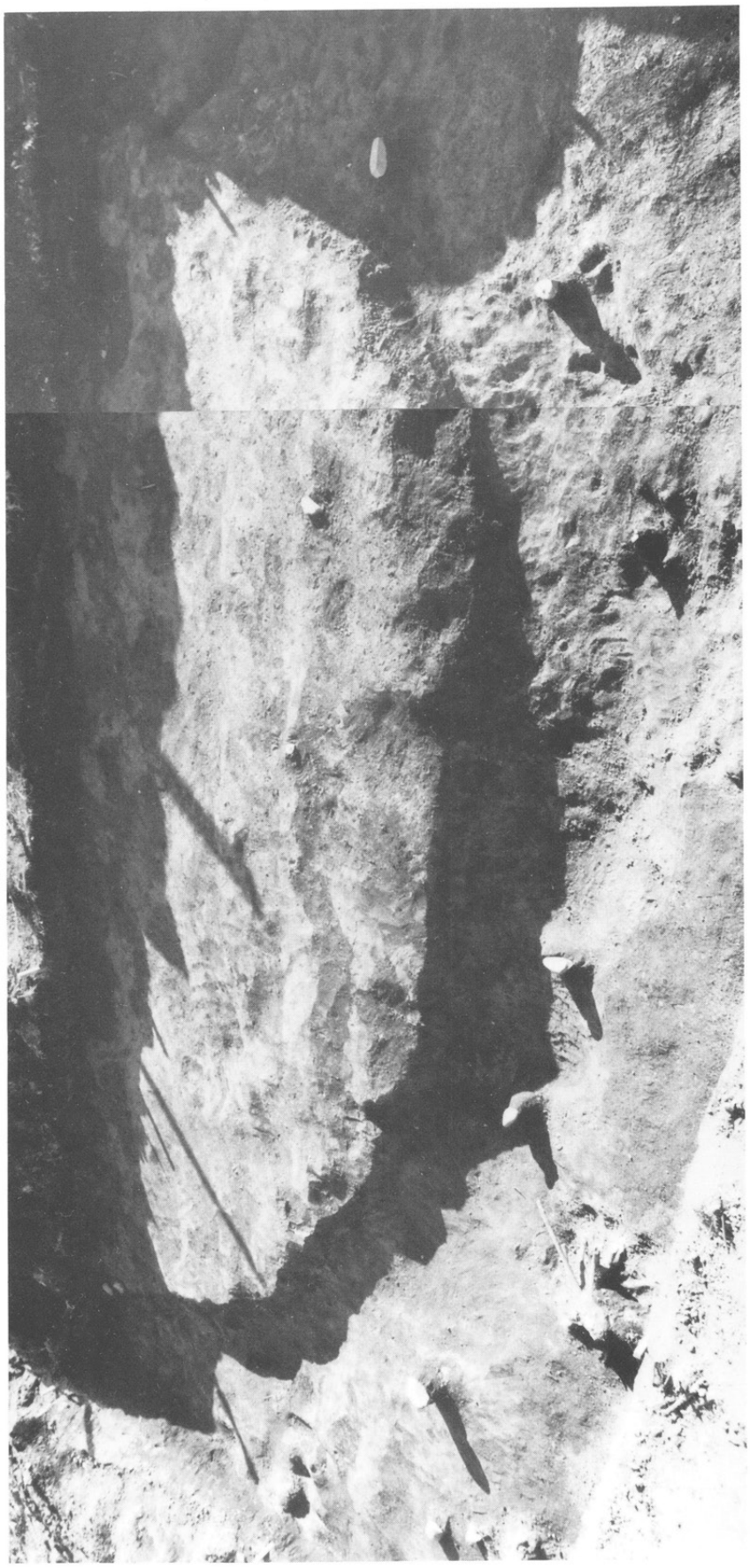
なお溝状の遺構については，同章でも述べているとおり，都合により凡そ３分の１の露呈のみであり，直径15.5mの円形周溝遺構としては認められるが，はたして世に云う円形周溝墓であるかどうかは，にわかには決しがたい。あるいは祭壇の基盤であるかと云うことも考えられるが，現在のところ何とも云えない。しかし，今次発掘調査の中で発見され

た唯一の特殊遺構であるので，重要な発見として重視したい。遺物の出土が溝の部分に集中しているのは，往時凹地となっていたため，自然的な没入，農耕地となってからの攪乱によるもので，遺構当初からのものでないことは察知できる。以上今次調査により得たものは遺跡地帯北部の限界を知り得たことである。

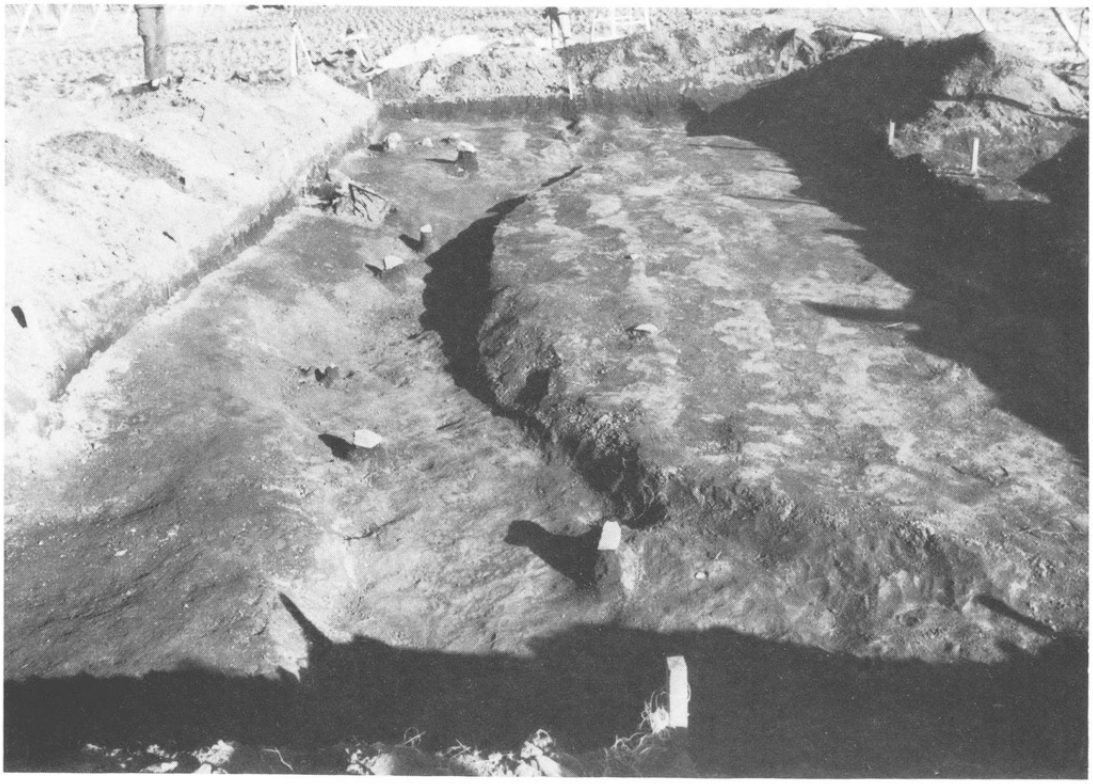
（原　　嘉藤）

図版第１．調査地域全景　上：Ａ～Ｃ１～６，下：Ａ～Ｃ７～11

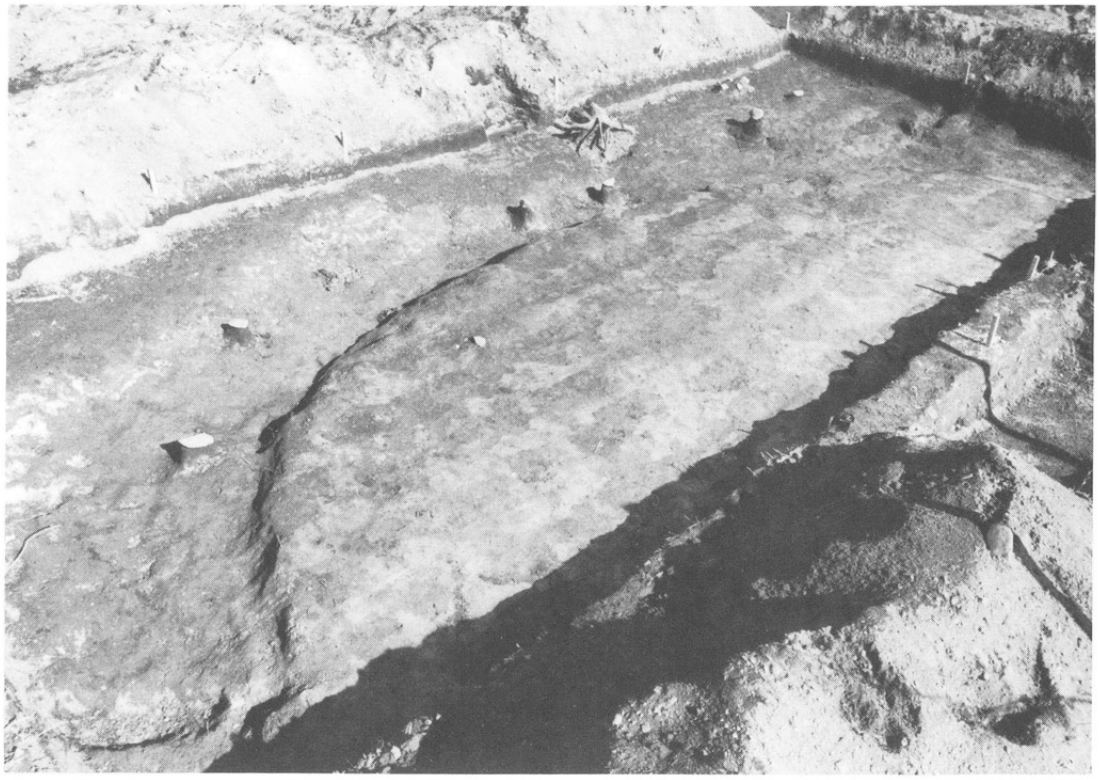
図版第２．調査地域全景　上：Ｄ～Ｆ１～４，下：Ｇ～Ｈ１～５

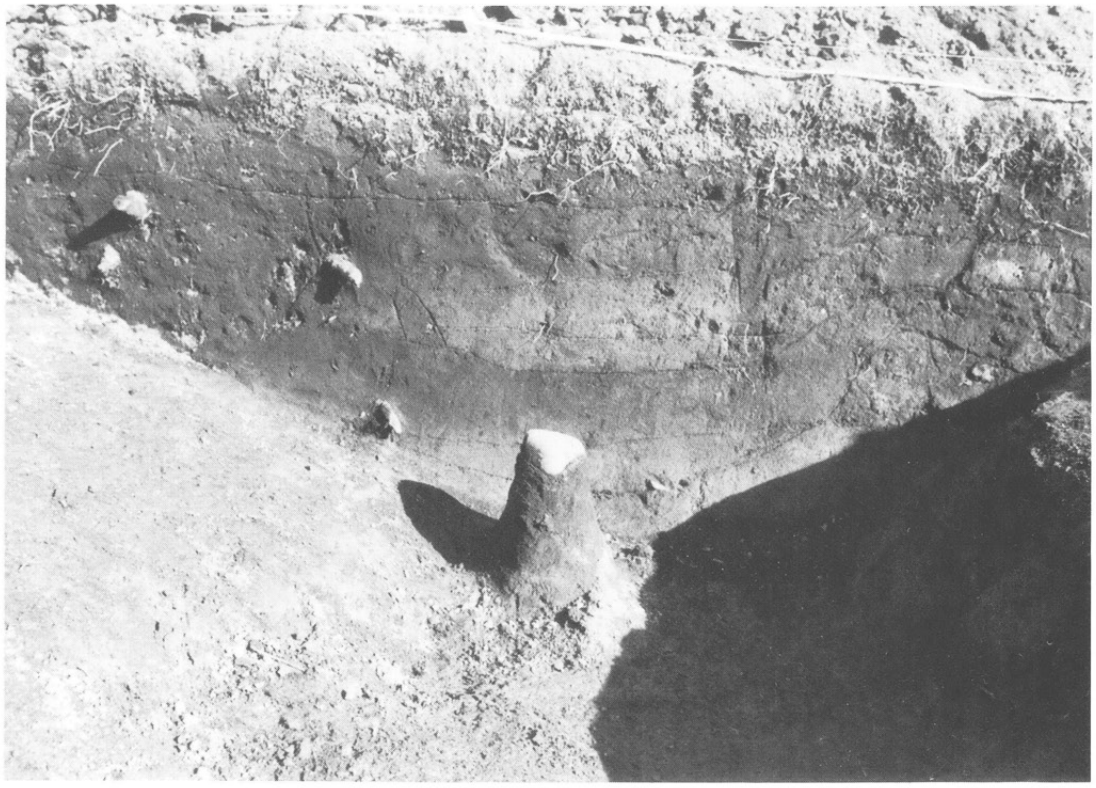


図版第３．溝状遺構全景　北側より



図版第４．溝状遺構全景　上：東側より，下：西側より





図版第５．上：溝上遺構全景　南側より
下：溝状遺構土層堆積状態

図版第６．遺物出土状態　上：土師器高坏，下：土師器甕

史 跡 **平出遺跡**

遺構確認調査報告書

――昭和55年度――

（非売品）

昭和56年２月１日　印刷

昭和56年２月10日　発行

発行所　長野県塩尻市教育委員会

印刷所　㈱　高　砂　印　刷　所